

LGBTQの性暴力被害者

性暴力は、あらゆるジェンダー・アイデンティティ、性的指向の人に深刻な影響を及ぼします。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クィア (LGBTQ) の人々も性暴力に遭います。そして、法律相談、医療、警察の保護などを受ける際、LGBTQであるがゆえの難しい問題に直面する可能性もあります。

性暴行の影響

LGBTQの性暴力被害者は、他の性暴力被害者と同じような感情を感じ、同じような問題に直面する一方、それ以外の障壁と向き合う場合もあります。以下に示したのは、LGBTQであるかどうかに関わらず、性暴力を受けた人に共通して見られる傾向です。

- 人に信じてもらいたいと思う。信じてもらえていないと感じたり、信じてもらえなくなると心配したりする。
- 自分を責める。恥ずかしく感じる。罪悪感にとらわれる。自分のせいだと思う。自分に落ち度があったのではないかと、起きたことを繰り返し考えてしまう。悪いのはあなたではありません。
- 孤独を感じる。性暴力の被害者は、そういう経験をしたのは自分だけだと感じたり、被害を誰かに打ち明けても相手に理解されないのではないかと恐れったりします。
- LGBTQは性暴力に遭わない、と勘違いしている人たちがいるために、人に話してもどうせ信じてもらえない、と考えてしまう。
- 被害者だと認めたくない。多くの被害者にとって、自分の体験が性暴力だったと認めるのはつらいことです。そして、その体験が自分の持っていた性暴力のイメージと違ったり、相手が想定外の人だったりすると、自分を被害者だと認めるのにより困難が伴います。
- カミングアウトしていないと相談しづらい。自分のジェンダー・アイデンティティや性的指向について友人や家族にカミングアウトしていない場合は、性暴力を受けたことを相談しづらいと感じるかもしれません。

- 信仰する宗教によってはサポートが受けづらい。多くの被害者は信仰に勇気づけられ、癒しを見出します。ただ信仰する宗教があなたの性的指向またはジェンダー・アイデンティティを受け容れない場合、必要なサポートを受けるのが難しいこともあります。

LGBTQ被害者をサポートするには

大切な人から性暴力の被害に遭ったことを告白された場合、どう対処してよいか戸惑うこともあるでしょう。被害者から最初に告白を受けた人の対応が、他の人へのさらなる相談など、その後の行動につながります。判断を差し挟まずに耳を傾け、被害に遭ったつらさを理解し、あなたがその人のことを気にかけているということをしっかり伝えましょう。

- **話を聞きましょう。**つらい状況にいる被害者の多くは、誰にも理解してもらえず、真剣に受け止めてもらえていないと感じています。しっかりと被害者の話に耳を傾け、他人事とは思っていないということを示しましょう。被害者にとって性暴力を告白するのはつらいことです。特にその人がまだカミングアウトをしていない場合は、同時にカミングアウトをすることになるので、相手のことを第一に考えて、受け止めてあげましょう。
- **相手の気持ちに寄り添いましょう。**「何とかなる」など過度に楽観的な発言をしたり、「元気を出して」「そんなに落ち込まないで」などと相手の感情をコントロールしようとするのはやめましょう。「あなたの話を信じる」「本当に大変な思いをしたね」など相手の気持ちに寄り添った言葉をかけましょう。
- **心配しているということを伝えましょう。**「とても心配している」「私がそばにいるから大丈夫」など、相手を気にかけていることを言葉にして伝えましょう。
- **被害者のジェンダー・アイデンティティと性的指向を肯定する言葉を使いましょう。**「ボーイフレンド / ガールフレンド」など相手のジェンダー・アイデンティティや性的指向を推測するような言い方ではなく、「パートナー」「デートの相手」などより幅の広い言葉を使いましょう。誰かのジェンダー・アイデンティティや呼び名(代名詞など)を決めつけないようにしましょう。本人がどう呼んでいるかを参考にするか、どういう呼び名を使うのがいいか直接尋ねてみましょう。不明な場合は、たとえば「彼」や「彼女」ではなく、「その人」などと呼びましょう。
- **暴行の詳細については尋ねないようにしましょう。**何が起こったのか心配で、事の顛末をすべて知りたいと思っても、こちらから詳細に尋ねるのは避けましょう。ただし、相手から暴行を詳細に話してきた場合は、余計な判断を差し挟まずに、親身に話を聞くようにしましょう。

被害者にかけてあげたい言葉。

「あなたの話を信じる」「話すのに勇気が要っただろうね」被害者にとって、暴行について話すのはとてもつらいことです。自分を恥じていたり、話を信じてもらえないのではないかと、非難されるのではないかなどと心配している場合もあります。多くを語らないからといって、暴行が事実ではなかったと推測したりしないようにしましょう。衝撃的な出来事に対する反応は、人によって違うものです。あなたにできる最善のことは相手を信じてあげることです。

「あなたのせいではない」「あなたは間違っただけをしていない」加害者が知り合いだった場合、もしくは暴行が起きたときに飲酒したり薬物を使用したりしていた場合、被害者は自分を非難するかもしれませんが、暴行が起きたのは被害者のせいではないことをしっかりと、場合によっては繰り返し伝えましょう。

「あなたは一人ではない」「あなたのことを思っている。そばにいてあげるから、できることは何でも言って」あなたがそばにいること、話をするのがいやでなければいつでも聞く準備があること、そして何が起こったにしてもその人への思いは変わらないことを伝えましょう。安心して助けを求められる人が他にもいるか尋ねましょう。

「こんなことは起こるべきではない」「なんて理不尽な出来事」暴行が被害者に深刻な影響を及ぼすことを理解しましょう。「本当に大変な思いをしたね」「話してくれてありがとう」などの言葉をかけると、あなたが相手を思いやっていることが伝わります。